

ドイツ緑の党創立期の潮流対立についての一考察

— 党内右派GAZを中心に —

西田 慎 奈良教育大学社会科教育講座 (歴史学)

Conservative Ecologists in the German Green Party : Focusing on the *Grüne Aktion Zukunft* ([GAZ] Green Action Future)

NISHIDA Makoto

(Department of History, Nara University of Education)

Abstract

The German Green Party was founded in January 1980 and has since consolidated its position in the national party and parliamentary system. Some Green Politicians can trace their origin to the student protests of 1968 and the New Left. Today, many people treat the German Green Party as the party of the “1968 generation.” However, the German Green Party was founded as an electoral and organizational alliance of several political groups, including conservative ecologists. Therefore, this article aims to clarify the importance of the roles played by conservative ecologists during the early era of the German Green Party.

This article stresses the following two points about the above-mentioned issue. First, many activists during the early era of the German Green Party, including conservative ecologists, belonged to the “1945 generation,” not the “1968 generation.” Second, conservative ecologists, mostly the “1945 generation,” left the party around 1981 because of differences in not only policies but also the “habitus” between the “1945 generation” and the “1968 generation.”

キーワード：緑の党, エコロジー, 保守

**Key Words: The German Green Party,
Conservative Ecologist**

1. はじめに

2020年から21年にかけて、ドイツの緑の党（正式名称は「90年連合・緑の党」）に耳目が集まる2つの出来事があった。一つは、2021年9月に行われた連邦議会選挙（総選挙）で躍進したことである。選挙戦で同党は初めて首相候補を立てて戦い、得票率14.8%を得て、第3党に躍進した。前回に比べて5.8ポイント得票率を増加させたこと、全国で16の小選挙区を制したことは、勝利と見ていいだろう。選挙後、同党は社会民主党、自由民主党との3党連立政権を発足させ、政権入りした。この連立は党のシンボルカラーが、社会民主党が赤、緑の党が緑、自由民主党が黄であることから、信号連立と呼ばれている。緑の党からは副首相兼経済・気候保護相にロベルト・ハベック共同党首、外相にアンナレーナ・バエル

ボック共同党首らが就任した。脱原発と脱炭素を両立した連立協定にはエコロジー政党である緑の党の影響が強いとされ、日本でも大いに注目を集めた。

もう一つは2020年に持ち上がった緑の党結党者の一人、ヘルベルト・グルールと右翼ポピュリズム政党「ドイツのための選択肢」（以下AfD）を巡る騒動である。2020年6月、緑の党の政治家ラインハルト・ロスケが、保守政党のキリスト教社会同盟の政治家ヨーゼフ・ゲッペルと共に、環境政治への貢献で数年前に授与されたヘルベルト・グルール賞を返上すると発表して、大きく報道された。同賞は、1980年に緑の党が全国政党として結党された際に、主要な結党メンバーとして名を連ねたグルールの名前を冠した賞であり、ヘルベルト・グルール協会が選定する。ロスケは2005年に、ゲッペルは2003年に同賞を受賞していた。

そのロスケが問題視するのは、同協会とAfDのつながりである。彼によると協会の会長フォルカー・ケンプフはバーデン＝ヴュルテンベルク州の地方自治体のAfD政治家、副会長ヴォルフラム・ベドナルスキもAfDに属するニーダーザクセン州の地方自治体政治家であり、同協会はAfDの偽装組織になっているという。例えば、同協会の幹部が論稿で移民問題について語ったなかで、移民は「環境への負担になっており」、制限されるべきにもかかわらず、既存の政党などは「制御できない」移民の受け入れを望んでいるとして、暗にAfDへの投票を呼び掛けたとされる。ロスケは緑の党結党者の一人であるグルール本人は評価するとしながらも、グルールの名前を騙る同協会は、グルールの名前を政治的に悪用し、極端に偏向して解釈し、国家主義的、ポピュリズム的、さらには民族主義的(völkisch)な目的で利用していると激しく非難する⁽¹⁾。ロスケもゲッペルも、当初はグルールの顕彰団体だったグルール協会が、今ではAfDに乗っ取られたと見ているのである。

後者の出来事は、緑の党に代表されるエコロジーと、保守、あるいは褐色(右翼)との一部でのつながりを図らずも明らかにしたと言えよう。一般に緑の党は中道左派に位置付けられ、社会民主党よりも左とされる。結党したメンバーの多くが、1968年前後の学生運動などを経験した「68年世代」⁽²⁾であることも知られている(井関2005, 西田2009)。一方で、結党メンバーにはグルールら保守派エコロジストの流れが存在したこともまた事実である。例えばグルールは、元は保守政党のキリスト教民主同盟の連邦議会議員であり、離党後、独自の環境政党設立を経て、緑の党に加わった。彼はベストセラーとなった自著『収奪された地球』で、環境問題解決のために民主主義の制限と独裁制の必要を説いたとして、左派陣営から「エコ・ファシズム」と批判されたこともあった。彼の他にも、かつて右翼政党の活動家だった過去を暴かれて緑の党代表の座を辞任した政治家もいたし、ナチス突撃隊の過去が発覚して連邦議会議員を辞任した緑の党政治家もいた。エコロジーと保守、あるいは右翼の一部でのつながりもまた事実なのである。

筆者は、これまでドイツの緑の党を研究対象とし、これを1960年代後半にドイツで生じた若者による反体制民主化運動(68年運動)とのつながりから明らかにしてきた(Nishida 2005, 西田 2009, 西田 2012, 西田 2013, 西田 2014, 西田 2015, 西田 2019)。具体的には68年運動の終息後、運動の一部がエコロジー運動に合流したことで、緑の党のルーツを形成したこと、その後の緑の党内の激しい路線対立、主導権争いも68年運動が抱える矛盾が表出したことを指摘した(図1)。

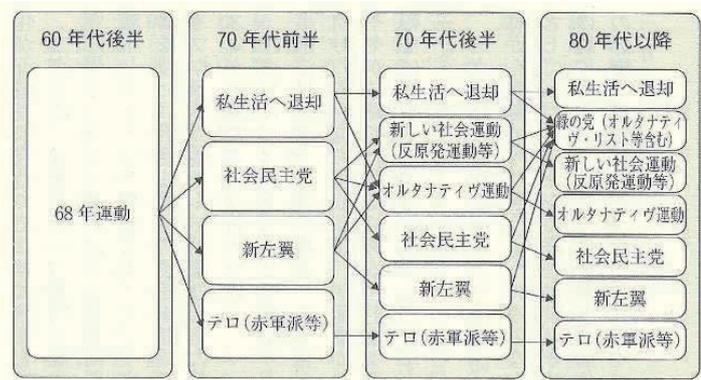


図1 68年運動から緑の党への流れ

出典：西田 2014: 86

その一方、一連の研究に対し、ドイツの緑の党には68年運動やその流れを汲む新左翼だけでなく、エコロジー保守派も加わっていることを等閑視しているという批判も寄せられた(例えば保坂 2013a: 195)。すなわちドイツのエコロジー運動は戦前期以来、むしろ保守思想と親和性を持ち、活動家の一部はナチ党へも積極的に関与したこと、戦後もエコロジー運動を主に担ったのはそうした保守的なエコロジストであったこと、1970年代後半以降緑の党結党の過程で主導権を握ったのも彼らエコロジー保守派であったことへの分析が不十分であるという指摘である。また近年、緑の党は価値保守的(wertkonservativ)で市民的な(bürgerlich)価値観を持つ中道政党の性格を強めているという指摘もあり、ドイツでは総選挙のたびに保守政党との連立も取りざたされている。

それゆえ本稿では、これまでの筆者の研究に寄せられた疑問・批判に対する応答の意味も込めて、緑の党結党期においてエコロジー保守派の果たした役割を考察する。なかでもグルールが事実上のリーダーだった「緑の行動・未来」(以下GAZ)とその後継政党であるエコロジー民主党を中心に扱う。その理由は、主に3つ挙げられる。

第一に、緑の党結党期に党内で活躍したエコロジー保守派にはいくつかのグループがあったが、全国レベルで組織化されたのはGAZのみだったことである。

第二に、冒頭で「緑の党結党者の一人であるグルール本人は評価する」というロスケの発言を紹介したように、グルール個人は今なお、緑の党内でも一部で評価されており、彼の果たした役割を考察することは、現在でも意義を持つことである。ちなみにそれ以外のエコロジー保守派の成果が、現在緑の党内で振り返られることはほとんどない。

第三に、緑の党を離党後もグルールらが立ち上げたエコロジー民主党は、その後何度か緑の党との合同話が持ち上がるなど、緑の党と完全に縁が切れた訳ではないこ

とである。例えば1989年頃には緑の党ハンブルク州支部に当たる「緑・オルタナティブ・リスト」(GAL)内で現実派がエコロジー民主党との合同を模索するなど、両者の提携・合同話はその後、繰り返されることになる。他のエコロジー保守派で、こうした経緯を辿ったグループはない。

また紙数の関係から、緑の党結党前後から、グループらが離党してエコロジー民主党を結成する1982年までを前編として本稿で扱い、一旦緑の党を離れながらも、90年のドイツ統一前後に緑の党の一部と連携を試みるなど、緑の党とつかず離れずの関係を続けていく83年以降の動きを後編として次稿で扱う予定である。

本稿で主に使用するのはドイツ・ベルリンにある緑の党史料館(Archiv Grünes Gedächtnis)所蔵の史料である。さらに対極的な立場にある左派から見たエコロジー保守派の立ち位置を知るために、新左翼・共産主義者同盟(KB)の機関紙であった『労働者の闘争』(AK)も適宜用いる。当時、同紙は反原発運動を熱心に報道し、一種の情報源として機能していた。共産主義者同盟のメンバーが2000人ほどだった当時、それをはるかに上回る部数2万部以上を売り上げており、反原発関係者に広く読まれていたと言われている。

2. エコロジーと保守

日本ではこれまで環境運動やエコロジー思想は、「市民運動」「住民運動」のイメージから、一般に左派的と見なされてきた。たしかに1960年代以降の水俣病などの公害に対する反対運動と裁判闘争を始めとして、大規模な開発への反対運動などは主に左派的な勢力によって担われてきたのは事実である。63年に社会党から横浜市長に就任した飛鳥田一雄が、「横浜方式」と呼ばれた公害防止協定を制定し、それが全国に波及したように、社会党や共産党に支持された70年代の革新首長が、経済成長のひずみである環境や公害問題に熱心に取り組んだこともよく知られている。

一方で、エコロジーと保守思想の親和性を説く議論も少なくない。「故郷を守れ」「一木一草に神々が宿り給う」といった土地・風土への愛着としての素朴な自然崇拜と、民族主義、国粹主義が結びついていく事例は歴史的に見ても枚挙にいとまがない。例えば永井清彦は、日本の右派エコロジーの例として、「玄米正食運動」の桜沢如一を挙げている。太平洋戦争中に「神国日本のありがたさ」を説き、ナチズムに傾倒して優生学を唱えた人物であり、彼の言う「身土不二」はエコロジーの考え方に連なると永井は指摘する(永井 1983: 199)。また伊藤昌亮は、近年のネット右派の分析において、戦前の農本主義の影響を受け、「日本の山河を守れ」と環境問題に熱

心に取り組む新右翼活動家の事例を取り上げている(伊藤 2019: 240)。

ドイツでも19世紀末から20世紀初頭にかけて、急激に進む工業化に反発して、ロマン主義的な文化批判の立場から、郷土保護や自然保護を唱える団体が多く発生した。郷土保護同盟、田園都市運動、ワンダーフォーゲル運動などである(竹中 2004)。農民の生活や土着性を理想化する彼らは、やがて右翼やナチスに吸収されていく。例えば動物保護運動の一部は、動物実験批判(反生体解剖主義)の立場から、ユダヤ人の戒律に従った食肉処理のやり方にも反対し、ナチ期に至るまで反ユダヤ主義運動とつながっていたという(ユケッター 2014: 32)。実際、ナチスが政権を獲得した後の1933年11月に「動物保護法」が公布され、「動物を不必要に苛めたり手荒く虐待したりすることを禁ずる」として、麻酔なしの生体解剖の禁止などが盛り込まれた。ドイツ最初の包括的な自然保護法が制定されたのも、ナチス政権下の35年6月のことである(「帝国自然保護法」)。

第二次世界大戦後、ドイツ連邦共和国(以下西ドイツ)では戦前の流れとは断絶した自然保護団体が1950年代から60年代にかけて設立される一方で、ロマン主義的な文化批判の伝統から人的にも戦前からの右翼やナチスとの連続性を持つ団体も少なくなかった。その代表が「生命保護世界連盟」(以下WSL)であろう。59年にオーストリアで、64年に西ドイツで結成された同団体の設立者ギュンター・シュヴァーブは元ナチ党員であった(Radkau 2011: 227)。WSLは、60年代後半から西ドイツの反原発運動を熱心に支援していくが、逆に左翼はこうしたことから環境保護団体や反原発運動に当初は一定の距離を置いていた。彼らが反原発運動に関わるようになるのは、後述する75年のヴィール反原発運動からである⁽³⁾。

歴史学では近年、エコロジーと保守、とりわけナチスの関係を分析する研究が相次いでいる(小野 2013, 藤原 2005, 保坂 2013b, ユケッター 2015)。例えば小野清美は、アウトバーンの「景観代理人」アルヴィン・ザイフェルトを中心に、アウトバーン建設と景観エコロジーの事例から、ナチズムと自然保護・エコロジーの問題を考察する。小野は、ナチ・エコロジズムとは、ロマン主義、ネオ・ロマン主義、自民族中心主義を磁場とする、景観代理人たちにおいて郷土保護運動から凝縮してきた景観エコロジーと、「生命」「生命法則」をキーワードに、それを取り入れて景観のゲルマン化まで計画したナチスの人種主義的帝国主義との絡み合いの産物と見る(小野 2013)。また藤原辰史は、ナチスの一部が有機農業の一種である「バイオ・ダイナミック農法」を重視した事例を分析し、「血と土」に象徴されるナチスの農本主義的思想と有機農業に代表されるエコロジカルな思想の接点

を明らかにすることで、「ナチス・エコロジズム」の実態に迫った(藤原 2005)。

保坂稔は、社会学の立場から、ナチス環境思想と緑の党の関係についてドイツでのインタビュー調査も交えながら検討している(保坂 2013b)。一方ユケッター⁽⁴⁾は、『ナチスと自然保護』(原題『緑と褐色』)で、ナチ政権下で自然と景観を守る制度が国家によって整備されたのは事実である一方、その多くは中途半端に終わったこと、また自然保護運動の側も、ナチス政権に対して採っていた友好政策は、手に入り得るものを取り、機会がある時には飛びつくという戦略的なものであったことを指摘し、両者の距離の近さを強調しすぎることは慎重な立場を採る(ユケッター 2015)。

一方、戦後ドイツにおけるエコロジーと保守の関係について、緑の党とエコロジー保守派の関係を扱った研究も概観しておきたい。ドイツで緑の党に関する本が最初に出たのは1979年のことである。ヤン・ペータースの編纂による『原子力国家へのオルタナティブ』がそれであるが、同書は「エコ・ファシズムの真の危険について」という章を設け、付録にGAZの「緑のマニフェスト」や極右の「エコロジー・マニフェスト」を収録するなど、緑の党内で保守派・右派が強かった当時の雰囲気をよく伝えている(Peters 1979)。特筆すべきは政党研究者リヒャルト・シュテスによる80年の『ナショナリズムから環境保護へ』であろう。同書は緑の党共同代表を務めるアウグスト・ハウスライターが、ナショナルな色彩の強い「ドイツ協会」(DG)や「独立ドイツ人行動共同体」(AUD)設立を経て、緑の党に入って来たことを詳細な研究で明らかにし、彼のナショナリストとしての過去を暴いて、センセーションを引き起こした。結果としてハウスライターは党の共同代表辞任に追い込まれている(Stöss 1980)。

日本でドイツの緑の党に関する最初の包括的な本が出たのは、1983年に永井清彦によって書かれた『緑の党』であろう。同書は「68年世代」が緑の党結党の中心になっていくことを記述する一方で、当初はエコロジーないし自然への関心はリベラルにも左派にも希薄だったこと、それらがヴァイマル期の反動的な自然崇拜へつながることを恐れていたことなどを記している。そして後者の反動的伝統の延長線上にあるエコロジー右翼としてルーデンドルフ将軍の妻が率いる「ルーデンドルフ運動」と共に、「連帯的民族運動」「自然政策的民族党」「生命保護世界連盟」(WSL)などを挙げている(永井 1983: 186)。

一方で1986年に出た仲井斌の『緑の党』も、緑の党に関する包括的な文献として重要だが、エコロジー保守派への言及はほとんどない(仲井 1983)。それに対して、緑の党の概説本の最新版とも言うべき小野一の『緑の

党』には、西ドイツ緑の党結党時に保守派エコロジストが重要な役割を演じたことが言及されている。美しい景観や郷土を将来世代に引き継いでいくこと、自然への畏敬や生命を愛おしむこと、浪費せずに禁欲的でつつましやかなライフスタイルを実践することなどは、むしろ保守主義と通底するからである。もっとも小野は、例えばナチスの環境思想に、現代の環境政策や緑の党の思想と類似したものがあるとしても、それをもって両者の連続性を演繹するような議論は慎むべきとくぎを刺す。時代状況や、問題が提出された文脈が全く異なるからである(小野 2014: 103-104)。

近年の研究で、緑の党とエコロジー保守派の関係を扱ったものとして注目すべきは、次の2つであろう。まずは2013年に出た保坂稔の『緑の党政権の誕生』である(保坂 2013a)。保坂は、ドイツの緑の党は「68年世代」によって担われた政党だったから成功したとする井関 2005や西田 2009の見方を批判する。これらは左翼の強いハンブルク州やベルリン州における緑の党には当てはまるが、保守の牙城とされるバーデン＝ヴュルテンベルク州における近年の緑の党の躍進は説明できないからである。そして「敬虔主義」「人智学」「価値的保守」といった概念を基に、バーデン＝ヴュルテンベルク州の緑の党の独自性をインタビューも交えながら明らかにしている⁽⁵⁾。

また中田潤は、緑の党結党期を扱う一連の論文で、緑の党の保守派を担ったグルールやバルドゥール・シュプリングマンを扱っている。恐らく結党期の緑の党保守派を扱った文献の内、日本語で読めるものとしては、現時点で最も詳細なものだろう。ただ惜しむらくは、例えばグルールに関しては、緑の党を離党した時点で分析が終わっており、その後の緑の党とのつかず離れずの関係には触れられていないことである(中田 2015)。

3. 反原発運動から緑の党へ

本章ではまず、西ドイツにおける反原発運動の発生から、緑の党結党へという流れを概観しておきたい。

西ドイツ初の原発は、1960年にフランクフルト近郊のグロスヴェルツハイムで運転開始したカール実験原子力発電所である。当時は原子力の民生利用は、「平和利用」と称され、原発への大規模な反対運動はほとんど見られなかったという。ところが70年代以降、西ドイツが本格的な原発建設時代を迎えると、反原発運動が各地で生じるようになった。

特にその激しさで全国的に知られたのがドイツ南西部バーデン＝ヴュルテンベルク州のヴィール反原発運動である。冷却塔建設による局地的気候への影響、地下水の取水や、温排水による川の熱汚染、通常運転時の微量放

射能放出、さらには建設工事に伴う森林の伐採による環境破壊などが懸念され、住民によって反対運動が組織された。反対派は建設予定地を占拠するが、州政府が警察を使って彼らの強制排除に乗り出したことが逆効果となる。警察の手荒な行為が世論の批判を浴びた後、州政府は柔軟な交渉路線へ切り替えざるを得なかった。そうしたなか、1975年3月、フライブルク行政裁判所が工事中断を命じる決定を下し、原発建設計画は事実上頓挫した。

このヴィール反原発運動は次の3点で反原発運動の転機になった。第一に、全国的な注目を喚起したことで、各地の反原発運動は急速に活発化し、互いの連携が進んでいった。その結果従来の局地的原発立地紛争から全国的な反体制的反原発運動へ発展していったのである。第二に、以後は反原発運動に好意的な報道も出てくるようになり、世論でも原発に対する賛否が伯仲状態へ変化するなど、メディアの報道と世論も変化した。第三に、それまでエコロジー運動に距離を置いていた新左翼が、以後は反原発運動に大挙して参加してくるようになった。ヴィール反原発運動の激しさとその「勝利」を見た彼らは、ここに「革命的潜在力」があるとばかりに参加へ転じるようになったのである（西田 2012: 121-122）。

南ドイツで始まったヴィールの反原発運動は、1976年から77年にかけて北ドイツのプロクドルフ、グローンデ、カルカーにも飛び火した。プロクドルフとグローンデには原発が、カルカーには高速増殖炉の建設が計画されていたのである。これらに反対する運動は、新左翼も加わって数万人もの参加者を得るなど、きわめて先鋭化し、デモ隊と警察の激しい衝突は「エコロジー上の内戦」と呼ばれるほどであった。

こうしたなか、反原発運動の団体から、政党を設立して、選挙に参加する動きが出てくる。後の「緑の党」の原型である。先陣を切ったのは北ドイツのニーダーザクセン州であった。グローンデ原発やゴアレーベン核燃料再処理施設に対する反対運動が盛んな同州で、1977年10月に地方自治体選挙が行われた。ここで「緑のリスト・環境保護」(GLU)と「選挙民共同体・原発はゴメン」(WGA)という2つの環境政治団体が立候補するのである。そして、ヒルデスハイムの郡議会選挙に挑戦した前者は得票率1.2%で1議席、ハーメルン・ピルモント郡議会選挙に挑んだ後者も得票率2.3%で1議席を得た。通常ドイツの選挙では得票率が5%に達しないと議席が得られない5%条項があるが、この選挙では例外的に同条項がなかったことも幸いした。選挙後の12月、州レベルで「緑のリスト・環境保護」が設立されている。

翌年には隣のシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州でも、こうした動きが続いた。1978年3月の北フリースラント郡議会選挙で、「緑のリスト・北フリースラント」

(GLNF)が6.0%の得票率で2議席、反原発運動のプロクドルフを抱えるシュタインブルク郡の議会選挙でも、「緑のリスト・独立選挙民」(GLUW)が6.6%の得票率で3議席を得たのである。これは初めて5%条項を突破しての議席獲得であった。選挙後の5月、「緑のリスト・北フリースラント」と「緑のリスト・独立選挙民」のイニシアティブで、新たに「緑のリスト・シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン」(GLSH)が結成され、ここでも州レベルで緑のリストが設立された。

やがて緑のリストが、州議会選挙に挑戦していくのも自然な流れである。それが初めて成功したのが1979年であった。10月のブレーメン市議会選挙（ブレーメン市はブレーマーハーフェン市と共にブレーメン州を構成する都市州のため、州議会選挙と同格）で「ブレーメンの緑のリスト」(BGL)が、得票率5.1%で4議席を獲得したのである。翌年3月のバーデン＝ヴュルテンベルク州議会選挙でも、緑の党が得票率5.3%で6議席を獲得し、以後も州議会への進出が続いていく。

こうした地方自治体選挙での健闘を受け、ドイツ各地の環境保護や反原発を掲げる政治団体を糾合して、全国政党を結成しようという機運が1978年頃から出てくる。その結果79年3月にフランクフルト近郊で結成されたのが、「それ以外の政治的結社・緑の党」(SPV)である。中心となったのは「緑の行動・未来」(GAZ)、「緑のリスト・シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン」のような右派と、「独立ドイツ人行動共同体」(AUD)、「緑のリスト・環境保護」、人智学系の「アッハベルク・サークル」のような中間派である。新左翼など左派はこの組織結成には懐疑的で距離を置いていた。ところが6月に行われた欧州議会選挙で「それ以外の政治的結社・緑の党」が善戦したことが、彼らの見方を変えた。議席は得られなかったものの、得票率3.2%を得た上、得票率に応じて巨額の選挙補助金（30万マルクの支出に対し、480万マルクの補助金）を獲得したのである。以後、左派も緑の党への参加に転じ、80年1月、南西ドイツのカールスルーエで「それ以外の政治的結社・緑の党」を母体に、全国政党「緑の党」が結成された（原語はDie Grünenで「緑の人々」といった意味だが、わが国での通例に従い「緑の党」と訳しておく）。右はエコロジー保守派のGAZから、左は毛沢東主義の新左翼まで、かなり幅広いスペクトルを結集することになった。10月の連邦議会選挙では得票率1.5%に終わり議席獲得はならなかったものの、次の83年3月の同選挙で得票率5.6%、27議席を獲得し、国政進出を果たしている。

4. グルールとGAZ

4.1. エコロジー保守派グルールとGAZ設立

緑の党結党期には、多くの保守的なグループが党内で活躍した。しかしその多くは州レベルでの活動にとどまった。「緑のリスト・シュレースヴィヒ=ホルシュタイン」や「ブレーメンの緑のリスト」がそうである。唯一全国レベルで活躍したのがGAZであり、それゆえ本章では、GAZに焦点を当てることにする。実際、緑の党の浩瀚な通史を書いたジルケ・メンデは、緑の運動の保守派は、他の誰よりもGAZの創設者グルールと彼の著作、特に『収奪された地球』によって、刻印されていると説いている (Mende 2011: 72)。

GAZは、1978年7月に、元キリスト教民主同盟の連邦議会議員ヘルベルト・グルールによって結党された。まずは結党者グルールについて、見ておきたい。

グルールは1921年10月22日にバウツェン近郊の村グナウシュヴィッツで、農場経営者の4人目の息子として生まれている⁽⁶⁾。両親はスラヴ系少数民族のソルブ系であり、プロテスタントだった。グルールは第二次世界大戦に出征し、捕虜となって、脱走した後、故郷に帰還している。さしあたり農業で生計を立てた後、アビトゥア (大学入学資格) を取得し、最終的に57年にベルリン自由大学でオーストリアの作家フーゴ・フォン・ホーフマンスタールの研究によって博士号を取得した。

政治活動に入ったのは30代に入ってからである。1954年に保守系のキリスト教民主同盟に入党し、61年から72年までは、その頃移り住んでいたハノーファー近郊のバルジングハウゼンの市議会議員を務めている。69年には連邦議会議員に選ばれ、国政に進出した。とりわけ彼が力を入れたのが環境問題であり、連邦議会ではキリスト教民主・社会同盟議員団の「環境への配慮・作業部会」を率いた。71年には同議員団内の「構造的経済政策のための連邦専門委員会」内に設置された環境問題小委員会の委員長にも就任している。75年7月にはドイツの有力な環境保護団体「ドイツ環境および自然保護連合」(Bund für Umwelt und Naturschutz Deutschland, BUND) の前身に当たる「ドイツ自然および環境保護連合」(Bund Natur- und Umweltschutz Deutschland) を他のエコロジストと共に設立し、11月にはトップに就任している。

環境問題専門家としてのグルールの名を一躍有名にしたのが、同年に彼が出版した環境問題に警告する『収奪される地球』である。グルールによると、きっかけはローマ・クラブによる『成長の限界』であった。本書はドイツ語に翻訳されて1972年に出版されたが、それ以前にグルールは英語で書かれた原稿を見せられ、環境破壊という重大な問題の原因と残された可能性について、同

書がほとんど語っていないことから、環境問題について自分で書いて出版する必要性を痛感したと言う (Gruhl 1990: 154, Mende 2011: 74-75)。やがて環境問題に関心のある同僚議員と訪米して、関連資料を収集するなど執筆作業を進めていった。こうして彼によって書かれて、1975年に出版された本書は35万部を売り上げるベストセラーになった。グルールによると、グスタフ・ハイネマン前大統領からも読んで非常な感銘を受けたという個人的な書簡を受け取ったという (Gruhl 1990: 176-177)。

もっとも本書の内容に批判がなかった訳ではない。例えば本書では、東側も西側も経済成長至上主義と言う点では変わらないと斥け、人類と地球を救うには、地球規模での意識の変化が必要とする。具体的には物質上の断念と、増大する人口を抑制するための出生コントロールが求められ、そのためには強い国家、ある種の独裁はやむを得ないとされた。そして「成長を止めてしまわぬまでも、遅らせるためだけでも、全産業部門の拡大を禁じ、新しい資本投下は古い工業施設が老朽化し、廃棄される分だけを認めるがごとき世界的独裁制が必要である」とするディミトリス・N・コラファスの議論を引用した上で、以下のように続ける。

「この独裁制は場合によってはスターリンのそれよりも厳しいことであろう。というもどんな逃げ道も地球を犠牲にせぬ限りは断たれているからである。そこではまさに最強の国が決して放棄しないであろう国家的自由がことごとく断たれることになろう」(グルール 1984: 311)

「地球はいまや満員となった宇宙船」である以上、素材、エネルギー、食糧の全般的配分を効率よく実施するには、個々の国民国家に任せるのではなく、世界政府を樹立してそれに委ねる必要がある、その世界政府にはスターリンを上回る独裁が求められると言うのである。左派陣営から、グルールが「エコ・ファシズム」と批判されたのも当然であろう。

もっとも本書の出版によって、自党のキリスト教民主同盟の中に環境問題についての議論を起こそうという彼の試みは失敗に終わった。それどころか経済成長の抑制を説く彼の考え方は、経済界の利害も重視する自党の主流とは合わなくなっていった。例えば1976年1月22日の連邦議会の演説ではグルールは原子力エネルギーのモラトリアム (原発増設の停止) を要求し、78年には中性子爆弾への反対を表明した。これはキリスト教民主・社会同盟議員団所属の議員では唯一であった。また76年末には、前述のプロクドルフ原発反対デモで演説に立って、当時のキリスト教民主同盟ニーダーザクセン州トップのヴィルフリート・ハッセルマンに叱責されている (Gruhl

1990: 193)。ジャーナリストのギーゼルヘル・シュミットによれば、当時のグルールは、エネルギーの節約を説き、無限の経済成長からの転換を訴えるなど社会民主党のエコロジー派で知られたエアハルト・エプラーよりも、エコロジー的だったほどであった (Schmidt 1986: 58)。

キリスト教民主・社会同盟議員団の「環境への配慮・作業部会」も、新たに議員団長となったヘルムート・コールによって解散させられ、グルールも党内で脇役に追いやられていった。グルールは後に自伝で自らの議員団内で3方面から攻撃を受けたと語っている。経済専門家、エネルギー専門家、テクノロジー専門家である。彼らの攻撃は熾烈を極め、次期連邦議会選挙で落選させるべき政治家リストのトップにグルールの名前が載っていたほどだったという。裏で糸を引いていたのはドイツ工業連盟 (BDI) 会長であったハンス＝ギュンター・ゾールであったと推測される (Gruhl 1990: 184)。

やがてメディアでも、彼の離党の噂がささやかれるようになっていく。しかし当初グルールは、離党をためらっていたようである。前述のように反原発運動が盛んなニーダーザクセン州で「緑のリスト・環境保護」が1977年に設立され、同団体からの立候補の打診もあった。この時は自分の選挙区のある地元ニーダーザクセン州で、自党のキリスト教民主同盟を裏切るような行為は出来ないと断っている (Gruhl 1990: 193)。しかし78年になると、グルールも離党と新党設立を真剣に考え始めた。80年に予定される次の連邦議会選挙で5%条項のハードルを乗り越えられる得票率5%以上の政党を作るには、2年ほど必要なこと、また78年秋にヘッセンとバイエルンの両州で州議会選挙が予定されており、これらの選挙に参加するためには、もはや時間がないことである (Gruhl 1990: 198)。最終的に78年7月11日に彼はキリスト教民主同盟を離党し、同年7月13日にGAZを設立した。なお離党後も連邦議会議員にはとどまり、会派無所属の議員として80年まで活動した。

こうして結党されたGAZは、まず地方自治体選挙に挑んだ。しかし1978年10月8日のヘッセン州議会選挙には、環境政党系がGAZも含め3つが乱立する結果となった。その背景には「緑のリスト・ヘッセン」(GLH)の候補者の一人、ダニエル・コーン＝ベンディトがドラッグのハシッシュとマリファナの合法化を要求したことがある。彼はフランスの1968年5月の「五月革命」の指導者であり、典型的な「68年世代」であった。反発した一部は「緑のリスト・ヘッセン」を去り、GAZに合流したが、その得票率は0.9%に終わった。一方10月15日のバイエルン州議会選挙では、GAZは「独立ドイツ人行動共同体」との共闘が成立し、「緑の党」の名前で、共同で立候補したこともあり、得票率は1.8%と健闘した。

しかしGAZは、党の組織面でもイデオロギー面でも、問題を抱えていた。組織的にはGAZは事実上グルールの個人政党であり、上からヒエラルキー的に組織された政党であった。例えば党は、まず連邦レベルで結党された後、次に下の州レベル、そしてさらにその下の郡や地域レベルで組織が作られるという形であり、下からのボトムアップ型の「新しい社会運動」型組織とは正反対だった。副党首はミュンスターの核物理学研究所の元所長でありながら、反原子力派に転じたエーリヒ・フスターと、ボーフムの天文台所長としてよく知られたハインツ・カミンスキが務めたが、党首グルールや副党首2人を始めとして、結党メンバーは著名な中高年男性によって占められており、「名士政党」(Honoraioerenpartei)と評されたという (Mende 2011: 79)。

また党のイデオロギーも批判を招いた。例えば党の綱領「緑のマニフェスト」は、党首グルール自身によって書かれたが、保守的な近代批判で満ちていた。それは次のような一節が見られることから明らかであろう。

「生命は家族に始まる。民族の最も重要な地位としての母親には、より多くの称賛と公正が与えられなければならない。女性には何事にも男性と同じ権利が与えられるべきである。とりわけ同じ労働には同じ賃金が与えられる権利がそうである」⁽⁷⁾

GAZの「緑のマニフェスト」は、後にラインラント＝プファルツ州の極右政党・国民民主党 (NPD) の「エコロジー・マニフェスト」の原型になったともされる⁽⁸⁾。加えて前述のように党首グルールが自著『収奪される地球』において、人類が生き残るために、軍備を増強し、エコロジー独裁の必要を唱えていたこともあり、左派陣営からは「エコ・ファシズム」と批判されることもしばしばだった。

メンデによれば、緑の党結党期の保守派には以下のような人物が多いと言う。1920年代から30年代生まれの高学歴の中間層で、かなりの収入を得ている。終戦と国土再建に人生を刻印され、50年代後半以降の西ドイツの運命に逆らわずに来たが、環境保護という立場から、経済成長という西ドイツの成功モデルに突如反対せざるを得なくなった人たちであると。世代的に言うと、1922年－32年生まれで、1945年の敗戦を10代半ばから20代前半で迎えた「45年世代」に相当するという (Mende 2011: 84)。この図式に従えば、この時期のグルールら保守派への左派の批判は、前者の「45年世代」と後者の「68年世代」の対立という図式を見ることも可能であろう。

このGAZ創設期に、早くも分裂騒動が生じている。党首グルールは、「独立ドイツ人行動共同体」、「緑のリスト・環境保護」、「緑のリスト・シュレースヴィヒ＝ホ

ルシュタイン」を含む別の中間派や左派との共闘を目指したのに対し、副党首カミンスキらは、それは「左傾化」として拒否した。最終的に後者は、党を離れ、他の保守派エコロジストと共に「現実的な環境保護同盟（中道の党）」(UNU)を1979年4月に設立した(Klotzsch/Stöss 1986: 1551)。一方、GAZは最初の連邦党大会を79年3月にヴェルツブルクで開催し、欧州議会選挙に向けた選挙同盟を結ぶことを可決した。

4. 2. 緑の党結党への参加と党内右派GAZ

1979年3月に開かれた設立党大会で、「それ以外の政治的結社・緑の党」(SPV)が結党されると、GAZも党に加わった。3人からなる党の共同代表の1人にグルールも選ばれている。残りの2人は「独立ドイツ人行動共同体」出身のハウスライターと「緑のリスト・環境保護」出身のヘルムート・ネッダーマイヤーであり、右派・中間派出身の結党であったことが窺われる(表1参照)。欧州議会選挙に向けた党の候補者名簿でも、グルールは2位に名前を連ねた。

表1 緑の党代表の変遷(1979年-1989年)

年月	名前(生年, 出身)
1979年 3月	ヘルベルト・グルール(1921年, GAZ) アウグスト・ハウスライター(1905年, AUD) ヘルムート・ネッダーマイヤー(1938年, GLU)
1980年 3月	アウグスト・ハウスライター(1905年, AUD) * ペトラ・ケリー(1947年, SPD) ノルベルト・マン(1943年, GLU) *80年6月にディーター・ブルクマン(1939年, AUD)に交代
1981年 10月	ディーター・ブルクマン(1939年, AUD) ペトラ・ケリー(1947年, SPD) マノン・マレン=グリーゼバッハ(1931年)
1982年 11月	マノン・マレン=グリーゼバッハ(1931年) ライナー・トランベルト(1946年, KB) ヴィルヘルム・クナーベ(1923年, CDU)
1983年 11月	レベッカ・シュミット(1954年, KPD) ライナー・トランベルト(1946年, KB) ヴィルヘルム・クナーベ(1923年, CDU)
1984年 12月	ユッタ・デイトフルト(1951年) ライナー・トランベルト(1946年, KB) ルカス・ベックマン(1950年)
1987年 5月	ユッタ・デイトフルト(1951年) レギーナ・ミヒヤリク(1958年) クリスティアン・シュミット(1943年, SPD)
1989年 3月	ルート・ハマーバッハー(1953年, SPD) ラルフ・フュックス(1951年, KBW) フェレナ・クリーガー(1961年)

AUD 独立ドイツ人行動共同体(中間派)
CDU キリスト教民主同盟(中道右派)
GAZ 緑の行動・未来(右派)
GLU 緑のリスト・環境保護(中間派)
KB 共産主義者同盟(左派)
KBW 西ドイツ共産主義者同盟(左派)
KPD 北京派ドイツ共産党(左派)
SPD ドイツ社会民主党(中道左派)

出典: Nishida 2005: 284-290等を基に筆者作成

その欧州議会選挙では議席獲得はならなかったものの、得票率3.2%は善戦と見なされ、全国レベルでの緑の党結党の機運が盛り上がった。最終的に1980年1月にカールスルーエで緑の党の結党大会が開かれ、正式に党が設立された。しかしGAZは緑の党に参加したものの、自ら解散することは拒否した。緑の党がエコロジーというテーマに十分集中していないことと、党内で影響力を増大させる新左翼への批判が理由であった。

GAZを始めとする党内保守派の思想的立場としては、まず何よりもエコロジー重視という点が挙げられよう。資源浪費型の経済成長と消費社会化が鋭く批判され、自然の収奪と浪費型消費形態の断念が求められる。一方で左派の求めるような社会政策への関心は薄く、綱領等でも言及されるのはわずかか、ほとんどない。環境問題の解決なくしては人類の生存はなく、ましてや社会問題の解決はないという立場である。

またこれに関連して、物質的豊かさの断念を求める保守派の立場は、社会政策の充実によって、むしろ物質的豊かさをすべての階層に行きわたらせることを求める左派と衝突することになったし、資源の浪費を抑制し、地球を守るためには強い国家、場合によっては独裁制も必要とするグルールらの考え方は、左派と相容れることは当然なかった。

やがて緑の党内での右派と中間派・左派の亀裂は深まっていく。きっかけは1980年6月のドルトムント党大会である。ハウスライターが右派政治家としての過去を暴かれて、党代表を辞任した後、グルールは後任の党代表選挙に立候補したものの、ハウスライターと同じ「独立ドイツ人行動共同体」出身のディーター・ブルクマンに敗れた。1回目の投票ではグルールが最多得票を獲得したにもかかわらず、2回目の投票で2、3位連合を結成したブルクマンが勝利したのである。グルールは怒りをあらわにししながら、同じ右派の「プレーメンの緑のリスト」らと共に、会場を後にした。

また政策面での亀裂も深まっていった。その契機となったのが1980年3月に開かれたザールブリュッケン党大会である。同党大会で緑の党は連邦綱領を可決し、党の4大原則として「エコロジー的」「社会的」「底辺民主

主義的」「非暴力的」の4つが定められると共に、原発の即時停止、すべての外国軍隊の国内からの撤退、東西欧州への非武装地帯の創設などが要求された。しかしその綱領が対立の火種となる。例えば「経済と労働の世界」の部分では、完全に賃金補償した上での労働時間短縮のような労働組合寄りの要求が取り上げられており、全般に左派色の濃いものであった。右派はこれを激しく批判し、もっとエコロジーに重点を置くよう要求した。例えばグルールは、党内左派らが「オルタナティブな空中楼阁」というユートピアに固執していると批判する文書を発表して、連邦綱領は、「迫りくる未来の問題に対していかなる現実的な答えも与えていない」「エコロジー的思考においても是認できない」「それ自身矛盾している」「基本法（引用者註：憲法）とも一致しない」と激しく批判した上で、以下のように続けた。

「階級闘争のイデオロギーと物質主義的要求が、この現綱領のかなりの部分と選挙綱領にもまた決定的役割を果たしている。人間の基本的な態度が変わらない限り、それ自身説得力のあるエコロジー上の綱領が作成されることは出来ない。こうした欠点か、今挙げた以外にも、この綱領の多くの点に影響を与えていることが見いだされる」（下線はオリジナル）⁽⁹⁾

これはGAZ党首グルールに限らない。別のGAZ党員も、連邦綱領の「今日の経済システムの危機」の章について以下のように批判している。

「緑の党によってなされた分析は、エコロジー的というよりも社会主義的に示唆された見方でなされたものである。それは「大資本の利益」「社会的及び精神的貧困化」「まさにここにこそエコロジー運動と労働運動が結びつかなければならない」といった言葉遣いに明らかだ。そのような思慮は、現実のエコロジー問題からそらされている（後略）」⁽¹⁰⁾

危機感を覚えた党内右派は、1980年7月にハノーファーで「緑の連盟」（Grüne Föderation）を設立した。GAZと共に、「緑のリスト・シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン」や「ブレーメンの緑のリスト」などが参加している。しかし「緑の連盟」はもはや自身を党内グループとしては理解していなかった⁽¹¹⁾。緑の党研究者のルドルフ・ファン・ヒュレンは、この「緑の連盟」設立でもって、党内右派の緑の党からの離脱は完全なものになったと見る（van Hüllen 1990: 312）。

4.3. 緑の党離党とエコロジー民主党設立

最終的にグルールは1981年1月に緑の党を離党する。

彼はその理由を当時週刊紙『ツァイト』で以下のように説明している。

「この党の路線変更は、もはや期待できないと確信するに至ったからだ。ニュルンベルクで行われた11月30日の連邦中央委員会（Bundeshauptausschuß）では、共産主義者同盟から来たメンバー——いわゆる「Zフラクション」——を排除しようとするあらゆる試みが失敗に終わった。そもそもザールラント州支部がそのような提案を提出したことで、連邦中央委員会に叱責されたことは、とりわけ注目すべきことだ。多くのことに配慮する必要はないと今や急進左派が信じているとしか、私には考えられない（後略）」⁽¹²⁾

続けてグルールは、なぜ自身が綱領を批判している政党の党員にまだとどまっているのかという手紙をもらったことを紹介し、自分が党員であることはもはや望まれていないと述べている。緑の党内でエコロジー重視という目標が十分に追われていないという政策面での不満に加え、党内で共産主義者同盟など新左翼出身者の影響力が増大していることへの批判も見取れよう。

これは結党当初のエコロジー保守派ら「45年世代」が、後から入ってきた新左翼出身者などの「68年世代」に敗れていく過程とも言える。例えば緑の党代表の変遷を扱った表1を見てほしい。世代的に見ても、当初の1920年代、30年代生まれの「45年世代」から、時期を経るにつれ1940年代、50年代以降生まれの「68年世代」への交代がみられること、出身グループで見ても、GAZ、「独立ドイツ人行動共同体」、「緑のリスト・環境保護」といったエコロジー右派・中間派から、共産主義者同盟（KB）、北京派ドイツ共産党（KPD）といった新左翼出身者への党内での主導権交代が見られることが確認出来る。

加えてメンデは、エコロジー右派・中間派を担う「45年世代」と、新左翼出身者に多い「68年世代」のハビトゥス（振る舞い）の違いを指摘する（Mende 2011: 84-86）。例えば図2は、1978年当時のGAZの指導部メンバーであるが、右から4人目の党首グルールを始め、多くがスーツにネクタイ姿であることが分かる。アタッシュケースを提げている人もいて、ビジネスマンといった趣である。彼らが戦後ドイツの市民的な（bürgerlich）価値観に親和的であることが見て取れよう。一方図3は、1983年のデュースブルク党大会で選出された緑の党の執行部メンバーである。右から2人目の党代表の1人、ライナー・トランベルトを始めとして、多くがセーターにジーンズ姿である。図2とは逆に、新左翼の活動家上がりといった雰囲気がぬぐえない。そこから窺えるのはむしろ市民的な価値観への「反逆」「反抗」といったイメー

ジであろう。両世代がイデオロギーだけでなく、ハビトウスの面でも根本的に相容れず、「45年世代」の離反につながったことは想像に難くない。



図2 1978年当時のGAZ指導部

出典：Der Spiegel 30/1978: 28



図3 1983年当時の緑の党執行部

出典：Herzberg/Seifert 2002: XIII

その後緑の党を離党したグルールらは、1981年10月にエコロジー民主党を設立した。結党の中心はグルールであり、「緑のリスト・環境保護・ハンブルク」や「緑のリスト・ベルリン」(GLB)、シュプリングマンらも参加したものの、ほとんどの党員はGAZから来ていた。いわばGAZの発展的解消と言える。同党は、緑の党はイデオロギー的に乗っ取られており、もはやエコロジー運動の当初の目標を追っていないと批判した。そして82年3月にボン近郊でエコロジー民主党の最初の党大会が開かれ、グルールが党首に選出された。しかし時代と共に、グルールとエコロジー民主党間の意見の違いは大きくなっていく。89年には2度の分裂を経験している⁽¹³⁾。最終的に89年にグルールは新たな幹部会入りをあきらめ、連邦党首も辞任した。93年6月26日にグルールは71

歳で死去している。

現在もエコロジー民主党は存続しているが、全国政党としては、勢力は弱い。例えば2021年9月の連邦議会選挙での得票率は0.2%で獲得議席はゼロである。もっともバイエルン州などでは一定の勢力を保ち、2019年9月の欧州議会選挙では得票率1.0%で1議席を獲得した⁽¹⁴⁾。こうしたエコロジー民主党結党後の動きについては、次稿で詳しく扱いたい。

5. おわりに

本稿では主に、GAZを中心とするエコロジー保守派が緑の党を結党後、左派との路線対立に敗れて離党し、エコロジー民主党を独自に設立するまでを分析した。

明らかになった点は、次の2点である。まず緑の党結党の中心になったのは、当初は確かにエコロジー保守派に代表される「45年世代」だが、1980年代以降、新左翼出身者に代表される「68年世代」に取って代わっていくことである。その後の83年の連邦議会入りと国政進出、本稿では詳しくは触れられなかったが85年以降の州政権参加、98年以降の連邦政権参加でも、外相を務めたヨシュカ・フィッシャーやバーデン＝ヴュルテンベルク州首相を務めるクレッチェマンといった「68年世代」が中心になったことを踏まえると、緑の党は「68年世代」の党という基本的な性格付けは、間違っていないと思われる⁽¹⁵⁾。

また「45年世代」が「68年世代」と衝突し、離反していく過程では、保守的な前者と新左翼に近い後者というイデオロギー面だけでなく、市民的な(bürgerlich)価値観を身に付けた前者と、それに反抗的な後者というハビトウスの違いも根底にあったという点である。それは服装からしゃべり方、ドラッグの許容、暴力への向き合い方に至るまで、広範囲に及ぶように思われる。

もっとも本稿では、主に連邦レベル(全国レベル)での分析に終始したが、緑のリストや緑の党がまずは地方自治体で組織され、それが州や連邦といったボトムアップ型で組織されていった経緯を見るならば、地方自治体や州レベルにおける分析も必要であろう。これらは次稿の課題としたい。

*本研究はJSPS科研費 JP20K12321の助成を受けたものです。

註

- (1) Reinhard Loske über Gruhl-Gesellschaft: „Eine Tarnorganisation der AfD“, taz, 15.6.2020, <<https://taz.de/Reinhard-Loske-ueber-Gruhl-Gesellschaft/5692611/>>, 2022年11月11日閲覧。
- (2) 「68年世代」とは、1940年代、50年代に生まれ、1968年

- 頃には頂点に達した主に若者による反体制運動・民主化運動（学生運動やベトナム反戦運動など）を担った世代。日本で言う「全共闘世代」に当たる。
- (3) なお本田宏は、WSLの戦前からの極右との人的連続性を指摘する一方、同団体の右翼的潮流のみを強調するのは正当ではないとし、軍事・民生を問わず核技術利用に由来する放射能の影響に警鐘を鳴らして、反核運動に関わった医者など科学的教育を受けた人たちが、WSLに参加し、早くから反原発住民運動を支援した事実にも注意を促している（本田 2000: 283）。
- (4) ドイツの環境史研究者Frank Uekötterの日本語表記には、フランク・ユークター、フランク・ユケッターの2つの表記が存在する。本稿では無理に統一せず、それぞれの訳者による日本語表記に従うことにする。
- (5) バーデン＝ヴュルテンベルク州の緑の党の独自性を考察するなら、保坂のように「保守」だけでなく、南西ドイツで歴史的に強い自由主義の影響も考慮に入れる必要がある。実際バーデン＝ヴュルテンベルク州緑の党のヴォルフ＝ディーター・ハーゼンクレーパーやヴィンフリート・クレッチュマンは、80年代に「エコ・リパタリアン」という党内最右派のグループを結成し、活動した。ハーゼンクレーパーは後に自由主義の流れを汲む自由民主党へ移っている。
- (6) グルールの経歴については、彼の自伝であるGruhl 1990が詳しい。Mende 2011: 73-78も参考になる。邦語文献では中田 2015がある。一方Kempf 2008は、冒頭で記したように、著者自身が右翼政党AfDの政治家であり、グルールを政治的に利用しようとしていると非難されるなど、客観性に難があるため、引用には注意が必要である。
- (7) Das Grüne Manifest. Peters 1979: 400-404に史料として収録されている。
- (8) *Arbeiterkampf* (AK) 343, 3.6.1992.
- (9) Herbert Gruhl, Das alternative Luftschloß, Bonn, 29.9.1980, S. 1. Archiv Grünes Gedächtnis, A-Gerald Häfner, Sig.12 (3) .
- (10) Michael Arends, Das Parteiprogramm der Grünen aus der Sicht eines GAZ-Mitglieds, o.O., April 1981, S. 1-2. Archiv Grünes Gedächtnis, A-Gerald Häfner, Sig.12 (3) .
- (11) Olaf Dinnè, Was heißt und zu welchem Zweck: Grüne Föderation, in: Grüne Briefe: Informationen über die Grüne Föderation, die sich zusammengeschlossen hat, aus Grüne Aktion Zukunft, Grüne Liste Schleswig Holstein, Grüne Liste Bremen, Grüne Liste Umweltschutz Hamburg, AGÖP, 9. Folge, o.O., Oktober 1980. Archiv Grünes Gedächtnis, A-Gerald Häfner, Sig.12 (3) .
- (12) *Die Zeit* 5, 23.1.1981.
- (13) *AK* 343, 3.6.1992.
- (14) バイエルン州では全国平均を上回る31%の得票率を獲得している。なお欧州議会選挙では5%条項がない。
- (15) 保坂がエコロジー保守派の1人として挙げられているクレッチュマンも、1948年生まれの「68年世代」であり、西ドイツ共産主義者同盟 (KBW) という新左翼出身である（保坂 2013a: 73）。
- 小野清美 (2013) 『アウトバーンとナチズム—景観エコロジーの誕生—』ミネルヴァ書房。
- 小野一 (2014) 『緑の党—運動・思想・政党の歴史』講談社選書メチエ。
- ヘルベルト・グルール著 辻村誠三／辻村透訳 (1984) 『収奪された地球：「経済成長」の恐るべき決算』東京創元社。
- 竹中亨 (2004) 「文明批判としての『郷土』—ドイツ近代における環境保護の思想的背景—」『歴史科学』第175号、大阪歴史科学協議会。
- 仲井城 (1986) 『緑の党—その実験と展望』岩波書店。
- 中田潤 (2015) 「新しい社会運動における価値保守主義：H.グルールとB.シュプリングマンを題材に (1)」『茨城大学人文学部紀要 社会科学論集』第59号。
- 中田潤 (2019) 「新しい社会運動としての環境保護市民運動 (Bürgerinitiative)：ニーダーザクセン州における原子力関連施設建設反対運動を事例に」『茨城大学人文社会科学部紀要社会科学論集』第4号。
- 中田潤 (2020) 「緑のリスト環境保護 (Grüne Liste Umweltschutz) の成立：市民運動からエコロジー政党へ」『茨城大学人文社会科学部紀要社会科学論集』第6号。
- 中田潤 (2021) 「『緑のリスト・環境保護』内の路線対立：抗議政党から世界観政党へ」『茨城大学人文社会科学部紀要社会科学論集』第7号。
- 永井清彦 (1983) 『緑の党—新しい民主の波』講談社現代新書。
- 西田慎 (2009) 『ドイツ・エコロジー政党の誕生—「六八年運動」から緑の党へ』昭和堂。
- 西田慎 (2012) 「反原発運動から緑の党へ—ハンブルクを例に—」若尾／本田 2012。
- 西田慎 (2013) 「70年代西ドイツにおけるオルタナティブ運動の形成」『歴史学研究』911号。
- 西田慎 (2014) 「緑の党」西田／近藤 2014。
- 西田慎 (2015) 「第6章 西ドイツ—APO」西田／梅崎 2015。
- 西田慎 (2019) 「西ドイツの毛沢東主義新左翼—Kグループを例に—」楊 2019。
- 西田慎／近藤正基編 (2014) 『現代ドイツ政治—統一後の20年』ミネルヴァ書房。
- 西田慎／梅崎透編 (2015) 『グローバル・ヒストリーとしての「1968年」—世界が揺れた転換点—』ミネルヴァ書房。
- 藤原辰史 (2005) 『ナチス・ドイツの有機農業—「自然との共生」が生んだ「民族の絶滅」』柏書房。
- 保坂稔 (2013a) 『緑の党政権の誕生—保守的な地域における環境運動の展開』晃洋書房 2013年。
- 保坂稔 (2013b) 「第2章 緑の党とナチス環境思想—緑の党創設期メンバーとの対話から」保坂 2013a。
- 本田宏 (2000) 「原子力をめぐるドイツの紛争的政治過程 (1)」『北海学園大学法学研究』第36巻第2号、北海学園大学法学会。
- フランク・ユークター著 服部伸他訳 (2014) 『ドイツ環境史—エコロジー時代への途上で』昭和堂。
- フランク・ユークター著 和田佐規子訳 (2015) 『ナチスと自然保護：景観美・アウトバーン・森林と狩猟』築地書館。
- 楊海英編 (2019) 『中国が世界を動かした「1968」』藤原書店。
- ウルリヒ・リンゼ著 内田俊一／杉村涼子訳 (1990) 『生態平和とアナキー：ドイツにおけるエコロジー運動の歴史』法政大学出版局。
- 若尾裕司／本田宏編 (2012) 『反核から脱原発へ—ドイツとヨーロッパ諸国の選択』昭和堂。
- Herbert Gruhl (1990), *Überleben ist alles. Erinnerungen*, München [u.a.]: Ullstein.
- Anna Elisabeth Hallensleben (1984), *Von der Grünen*

引用・参考文献

- 井関正久 (2005) 『ドイツを変えた68年運動』白水社。
- 伊藤昌亮 (2019) 『ネット右派の歴史社会学—アンダーグラウンド平成史1990-2000年代』青弓社。

- Liste zur Grünen Partei? Die Entwicklung der Grünen Liste für Umweltschutz von ihrer Entstehung 1977 in Niedersachsen bis zur Gründung der Partei Die Grünen 1980*, Diss., Göttingen: Muster-Schmidt.
- Guntolf Herzberg/ Kurt Seifert (2002), *Rudolf Bahro – Glaube an das Veränderbare: Eine Biographie*, Berlin: Ch. Links.
- Rudolf van Hüllen (1990), *Ideologie und Machtkampf bei den Grünen. Untersuchung zur programmatischen und innerorganisatorischen Entwicklung einer deutschen „Bewegungspartei“*, Diss., Bonn: Bouvier.
- Volker Kempf (2008), *Herbert Gruhl - Pionier der Umweltsoziologie: Im Spannungsfeld von wissenschaftlicher Erkenntnis und politischer Realität*, Graz: ARES.
- Lilian Klotzsch,/Richard Stöss (1986), *Die Grünen*, Stöss 1986a.
- Silke Mende (2011), *"Nicht rechts, nicht links, sondern vorn": Eine Geschichte der Gründungsgrünen*, München: Oldenbourg.
- Makoto Nishida (2005), *Strömungen in den Grünen (1980-2003) : Eine Analyse über informell-organisierte Gruppen innerhalb der Grünen*, Münster: LIT.
- Jan Peters (Hrsg.) (1979), *ALTERNATIVEN ZUM ATOMSTAAT. Das bunte Bild der Grünen*, Berlin: ROTATION.
- Joachim Radkau (2011), *Die Ära der Ökologie: Eine Weltgeschichte*, München: C.H. Beck.
- Joachim Raschke (1993), *Die Grünen: Wie sie wurden, was sie sind*, Köln: Bund-Verlag.
- Giselher Schmidt (1986), *DIE GRÜNEN: Portrait einer alternativen Partei*, Krefeld: SINUS.
- Richard Stöss (1980) *Vom Nationalismus zum Umweltschutz. Die Deutsche Gemeinschaft/Aktionsgemeinschaft Unabhängiger Deutscher im Parteiensystem der Bundesrepublik*, Opladen: Westdeutscher Verlag.
- Richard Stöss (Hrsg.) (1986a) *Parteien-Handbuch. Die Parteien der Bundesrepublik Deutschland 1945-1980*, Opladen: Westdeutscher Verlag.
- Richard Stöss 1986b, *Die Aktionsgemeinschaft Unabhängiger Deutscher*, Stöss 1986a.